睦月にくるまれて

望月苑巳

夕立を匂う。
実朝の匂う。
やわらな梨花
その下で夏のような命がながれ
しなだれる。
その日は雪曼荼羅の睦月だったが
小路からは手毬唄がそうようにながれていた。

花弁から溢れだすあなたは
いくら絞っても
焦点がぼけてゆくよ
あつもの
思惟の雑踏に踏みにじられ
あつもの
おだやかに舞い降りた
実朝よ。

定家がゆっくりと言葉の弓をひけば。
手毬唄をおしえながら
夕立の、しめやかに虹の橋を渡ってゆく。
後鳥羽院の弔辞
どこまでもきなくさい弔辞
春まで待てないと気は遣って。

定家は舞ながらうたう
梨花にくるまれて泣きながら
燃え尽きるよ
木の国から
あなたは言の葉へ。